

市立病院だより



平成 23 年 3 月に JR 久宝寺駅から病院 2 階南玄関までの通路が開通しました。「雨の日でも傘をささずに駅から病院まで行けるようになった」と好評をいただいています。



八尾市在住・在勤者から公募した作品を展示している 2 階外来フロアの市民ギャラリー。10 月から新しい作品にリニューアルしていますので、病院に来られた際にはお立ち寄りください。

市立病院は地域の中核病院として、高度医療・救急医療・周産期医療・小児医療をはじめとする地域の医療ニーズにこたえるべく、医療機能の整備・充実に取り組んでいます。

本年 4 月には、肺がん治療のスーパードクターと称される兒玉憲医師を特命院長として迎えるとともに、消化器内科・腫瘍内科を標榜診療科といたしました。また、7 月からは脳神経外科に常勤医を迎え、現在では 2 名体制で脳神経外科領域の入院医療および救急対応を再開しております。

今回は佐々木院長と兒玉特命院長の特別対談などにより、現在の病院経営・運営状況と、今後の展望について、広く市民の皆様にご提供させていただく機会にしたいと思います。

特別対談 く地域の中核病院としての理想像を

目指して く 佐々木院長・兒玉特命院長

本年4月、八尾市立病院は「肺がん治療のスーパードクター」と称されている兒玉憲医師を特命院長に迎えました。日本人および八尾市のがんによる死亡数で最も多い「肺がん」。

当院ではこれまで呼吸器外科領域の専門医がおらず、その確保は重要課題の1つとして認識しておりました。

この分野に兒玉特命院長を迎えられたことは、診療機能のさらなる充実に向けた大きな出来事でもあります。

佐々木院長と兒玉特命院長は、それぞれ肝胆膵領域、呼吸器領域、特に「がん診療」における専門家として、数々のメディア等に取り上げられるなど、日本でも有数の著名な医師です。ともに当院に來られる前は府立成人病センターで活躍され、約30年に渡り互いを認め合う存在でもあります。

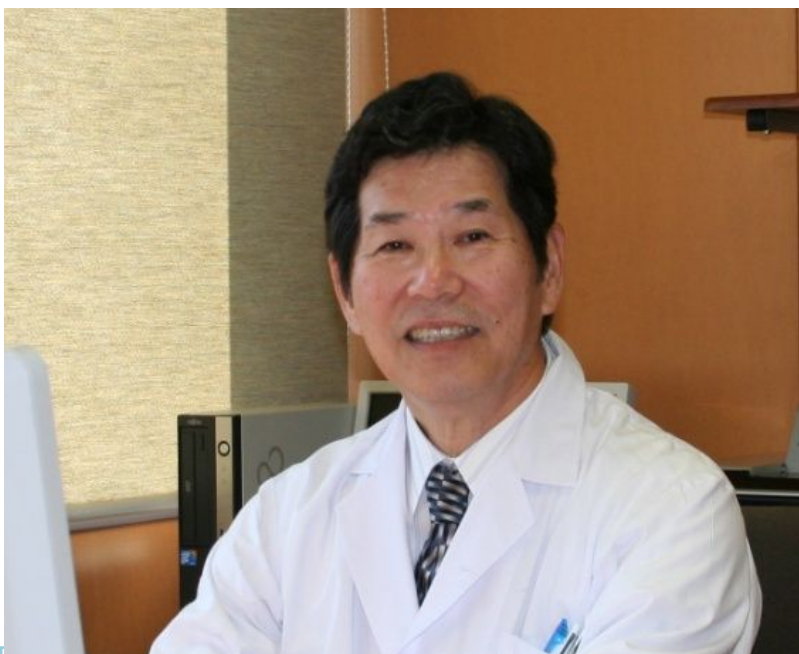
今回は、当院に來られた経緯や、市立病院という地域中核病院における医療のあるべき姿への思いなどについて、お二人のパーソナリティにも触れながらお話をうかがいました。

― まず、佐々木先生が当院に來られてから、今回兒玉先生を特命院長として招聘するに至った経緯を教えてください。

佐々木院長

私は、消化器がん、特に肝胆道系のがんの手術を長年にわたってしてきました。おろしも平成18年6月、厚労省主導により「がん対策基本法」が議員立法で成立し、平成19年4月に施行されました。その中で、日本人の死亡数の多いもの5つを「5大がん」として、これらに対する治療の提供が、がん診療拠点病院の指定を受けるための重要な要件の一つとして挙げられました。

平成19年に八尾市立病院に赴任した際、やはり「がん診療」を進めようと思ひ、そのためには、まず大阪府がん診療拠点病院の指定を受けることが必要と考えました。以前より胃がん、大腸がん、乳がんについては当院でもまずまずの実績がありました。肝がんについては実績らしいものはありませんでした。私の



病院長 佐々木 洋（ささき よう）

府立成人病センター消化器外科主任部長を経て平成19年1月八尾市立病院に着任。平成21年4月より病院長に就任。肝胆膵外科領域では日本でも著名な外科医として多くの書籍・メディアで紹介されている。

赴任後、肝がんの手術患者数は増加し、5大がんのうち4つまでは実績をあげることができました。しかし肺がんについては専門医が不在で、がん診療のネックとなっていました。兒玉先生は、私の最も尊敬する外科医であると同時に、私が成人病センターで消化器外科部長のときは、外科系診療局長として、直属の上司でした。頭の上がない（笑）存在である一方、遠慮なく本音を語り合える飲み友達でもありました。私が

八尾市立病院に赴任後も、時々飲み会をしたりして、交際が続きおりました。そのような機会にお話をさせていだいく中で、「病院管理業務には飽きて、再度バリバリの外科医に戻りたい」

という話をお聞きし、「それならぜひ八尾市立病院へ来ていただいて、当院で大きな穴となっている肺がんを中心としたがん診療、呼吸器外科診療をお願いしたい。また、八尾でがん診療を発展させましょう。」と意気投合し、三顧の礼をもって八尾市立病院にお迎えしたというわけです。

― 佐々木先生からの要請に対し、兒玉先生はどのような思いで当院に來られたのですか。



特命院長 兒玉 憲 (こだま けん)

府立成人病センター副院長を経て、平成23年4月より八尾市立病院に着任。肺がんの名医・スーパードクターとしてメディア等で取り上げられることも多く、現在でも肺がんの早期発見、手術術式の改良に取り組んでいる。

兒玉特命院長

28年間、府立成人病センターにて胸部悪性腫瘍（肺がん、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、悪性胸膜中皮腫など）の治療を行ってまいりました。その間、多数の手術に関わることで、優れた外科医を輩出してきました。私がいなくても成人病センターがさらに発展するという確信を持った時、佐々木院長が、八尾市立病院に来るよう熱心に勧誘してくださいま

した。八尾市立病院は非常にモダンな地域拠点病院で私のキーワードである「手術のできる現場」で力を発揮できると感じましたので、要請を受けさせていただきました。――「飲み友達」ということでですが、成人病センターに居られた時のお互いの印象はどうでしたか。

佐々木院長

手術が三度の飯よりも好き(?)という根っからの外科医であると同時に、すぐれた学術論文もばんばん書かれていて、技術も学問も一流という肺がん領域のトップサージャン(手術者)でした。

イタリアからも多くの外科医が兒玉先生のもとに手術の指導を受けに



来られていましたね。イタリア人外科医をJR環状線玉造駅の近

くに借りておられたアパート(平日は玉造のアパート、週末は和歌山の自宅で過ごされていた)に宿泊させたり、食事に連れて行ったり、京都や奈良を案内したりと、公私にわたって面倒を見ておられたことが印象深く思い起こされます。



逆にイタリアにも何度も招待されておられて、私も一度お供をさせていただいたことがあります。まさに「世界の兒玉」と呼ぶにふさわしい方であると尊敬していました。

性格的には非常にまじめな方ですが、一方、看護師さんや医局秘書さんから「憲ちゃん」と呼ばれ、大変人気がありましたよ。成人病センター主催の送別会では多くの女性が別れを惜しんで涙していました。

兒玉特命院長

佐々木先生は成人病センターでは私の先輩として、「肝臓がんの外科治療の名医」として、当時から全国に実力が知れ渡っていました。

彼の最大の長所は、「ポジティブ志向」にあると思います。常に前向きで、専門外のことをやらされても「その経験がいつかは何かの役に立つ」という考え方です。私も同じ考え方を持っています。

よく一緒にお酒を飲みますが……、某有名人のように酒癖が悪くなく、楽しく飲める仲間です。人事というのは難しいもので、私が八尾に来る前にも一緒に飲み屋で「密談」を重ねましたが、今から思えば良い思い出になりました。

――成人病センターで「バリバリ」働かれていたお二人ですが、当院に来られた時どのような印象を持たれましたか。

佐々木院長

着任当時(平成19年)の八尾市立病院の印象は、大変立派でホテルのような病院であり、電子カルテの導入も早くからされているなど、最新の設備がなされていると思いま

した。一方では、空きベッドもちらほらみられ、医師をはじめとする職員が、なんとなく元気がなく感じられ、「これは何とかしなくては」と思ったものです。また、個人個人の實力はあっても、チームとしてのまとまりがないようにも感じました。

児玉特命院長

非常にスタッフの接遇がよいと思います。廊下ですれ違っても全ての職種の方が挨拶してくれます。こういうのは気持ちの良いものだということが八尾に来て良くわかりました。電子カルテが前職場とはメーカーが異なるため当初は戸惑いましたが、医療秘書の方をはじめ、皆さんがその都度指導してくださり、抵抗なく職場に順応することができました。

入職直後より、院内の先生方からの紹介、八尾および近隣の医師会の先生方からの紹介、さらには以前勤務していた病院からの紹介があり、想定していたより早く業務が軌道に乗ったと思っています。

― お二人とも、要職にありながら、現在でも手術等、外科診療の第一線で活躍されています。佐々木先生は、ご自身の専門領域（肝胆膵外科）

における市立病院の現状の評価と、今後の展望についてどのようにお考えですか。



現在でも手術の第一線で活躍中。
(写真は佐々木院長の手術の様子)

佐々木院長

私の赴任時には肝胆膵外科の担当医が一人おりましたが、技術と知識を有している専門医ではなかったため、近隣からの紹介は極めて少なかったです。また消化器内科で診断された手術の必要な患者さんの大部分は他院に紹介されている状況でした。そこで、手術や、術後管理に熱意をもって取り組める優秀なスタッフを招聘・補充すると同時に、八尾市立病院においても、他の病院以上に肝胆膵外科手術ができることを、機会があることに（公開講座などで）アピールしてきました。その結果、

八尾市内や近隣の地区、さらには他の地域からも紹介していただけるようになり、手術症例数も次第に増加してきました。

また、全国的な多施設協同研究にも参加できるような実力がついてきたと思っております。将来的には、近隣以外の地域からも患者さんが押し寄せ、「当院で肝胆膵外科を研修したい」という若い医者が集まってくるような、大阪府東南部の肝胆膵外科の拠点施設をめざしたいと思っています。

― (児玉先生に) 当院にいられて半年間の主な治療実績を教えてください。また今後の展望についてコメントをお願いします。

児玉特命院長

呼吸器外科の手術件数は半年間で約40件です。抗がん剤治療が必要な患者さんは腫瘍内科にお世話になっています。気胸の患者さんも常時入院されていますし、私が院内にいる時間帯は胸部外傷も対応するようにしています。

八尾市立病院では腫瘍内科、感染制御内科、麻酔科、ICU、病理診断科、放射線科等、関連する部門が

大変充実していますので、腫瘍性病変や感染症・外傷等には十分対応できています。さらに、他臓器部門からは転移性肺腫瘍の患者さんを紹介していただき、積極的に手術を行っています。

今後、私が重点目標としていることは、当院に呼吸器センターを立ち上げ、それを定着させることです。そのためには次世代を担ってくれる呼吸器外科専門医を育てること、あるいは大学から人材を派遣していただけるだけの基盤を築いておくことが大事と考えています。

― 先程、児玉先生もおっしゃったように、佐々木先生はポジティブ志向であるとともに、アグレッシブな行動でも当院の改革に力を発揮されていますが、今日まで力を入れてこられたことについて教えてください。

佐々木院長

まず診療体制の強化として、がん手術の技術の向上や、がん化学療法の実践、チーム医療の推進などに取り組みました。また病院全体のレベルアップが必要と考え、手術および周術期を固める麻酔科、ICU、病理などの充実を図りました。

具体的には外科部門の優秀なスタッフの招請、現在のがん診療には欠かせないがん化学療法の特任家の招請、患者さんの身体的負担の少ない腹腔鏡手術の積極的導入などですね。また、チーム医療の推進に力を入れ、従来あった院内の医療チームを再編成するとともに、緩和ケアチームなどを新設し、院内委員会組織との関連性も整備しました。

施設面では府がん診療拠点病院の指定要件の一つでもある「がん相談支援センター」を設置し、当院での診療だけでなく地域住民の方のがん相談などに幅広く対応しています。

また、病院長として「医療レベルの向上」と「経営の安定化」は車の両輪と考えています。医療レベルの向上無くして安定した経営はあり得ないという思いのもと、診療体制の充実・診療機能の整備に邁進してきました。一方、医療レベルの向上を図る原資として経営の安定化は欠かせないものです。不必要なコストをできるだけ削減し、生み出した原資をできるだけ医療の質の向上のために投資していく、という考え方で様々な施策を進めています。

さらに、「地域医療連携」も重要な

取り組みです。当院では今年度から「登録医制度」を発足しています。

これは、かかりつけ患者さんの治療において、当院の設備・機能などを活用いただき、当院との連携により、より適切で質の高い医療を提供していきたいという思いの地域の先生方に登録いただいている制度です。地域医療においては救急診療も大切な課題です。循環器専門医のオンコール体制による「心臓コール」の開始や、常勤医が不在でご迷惑をおかけしていた脳神経外科の入院診療再開など、「断らない救急」をめざして取り組んでいるところです。

「いつもながらの「熱いコメント」ありがとうございます。」

兒玉先生が現在まで注力されたこと、また、今後の診療体制への展望などについてお聞かせください。

兒玉特命院長

病院理念に基づいた、安全で質の高い医療を提供することに力を入れてきました。スタッフ間あるいは他院との連携を強化し、チーム医療を推進することです。呼吸器外科はゼ口からの出発でしたので、必要な器材を揃えること、手術の手順や進行

がスムーズにいくようノンテクニカル・スキル(※)を重視してきました。また、自分の専門領域を院内外でアピールすることにも力を入れています。

今後は、次世代を担う優れた呼吸器外科医を育成することに力を入れたいと考えています。臓器別に見て、最も患者数が多いのは呼吸器です。それらを可能な限り、当院で治療することは、市立病院としての当然の使命です。ただし、今問題になっている閉塞性肺疾患(COPD)、無呼吸症候群、間質性肺炎

など、びまん性肺疾患に関しては、やはり専門の呼吸器内科医がいないと対応困難です。呼吸器の手術が増え呼吸器外科の存在感が高まれば、将来常勤の呼吸器内科医が来てくれるものと期待しています。

「兒玉先生の着任により、病院全体に府のがん診療拠点病院としてふさわしい体制が整ったという活力が溢れて来たように感じます。最後に病院長としてこれから強化していきたい部分について、ひとことメッセージをお願いします。」

※ノンテクニカル・スキル
専門的知識・技術以外のもの。コミュニケーション・リーダーシップ・状況認識・意思決定等

佐々木院長

あらゆる領域において診療のレベルを上げ、病院の実力と格を上げていきたいと考えています。特に診療部門においては「がん診療」と「地域医療」の両分野の推進をテーマに、今まで推進してきた取り組みについてさらに歩を進め充実させていきたいと思えます。



8月の河内音頭まつり大パレード。院長が積極的に参加することにより病院全体のチームワークも向上。

昨年度から病院職員に対しては、「一流の病院、品格のある病院をめざそう」とハッパをかけています。その具現化の過程において「患者さん・地域住民の方々に愛され、地域の医療機関に愛され、働く職員達に愛される病院をめざそう」とも語りかけています。ぜひ実現していきたいですね。

経営健全化に取り組んでいます
八尾市立病院改革プラン

市民の命と健康を守る役割を担う市立病院では、平成21年2月に「八尾市立病院改革プラン」を策定し、医療の質の向上と健全経営の両立をめざし、平成21年度から3ヶ年計画で経営改善に取り組んでいます。

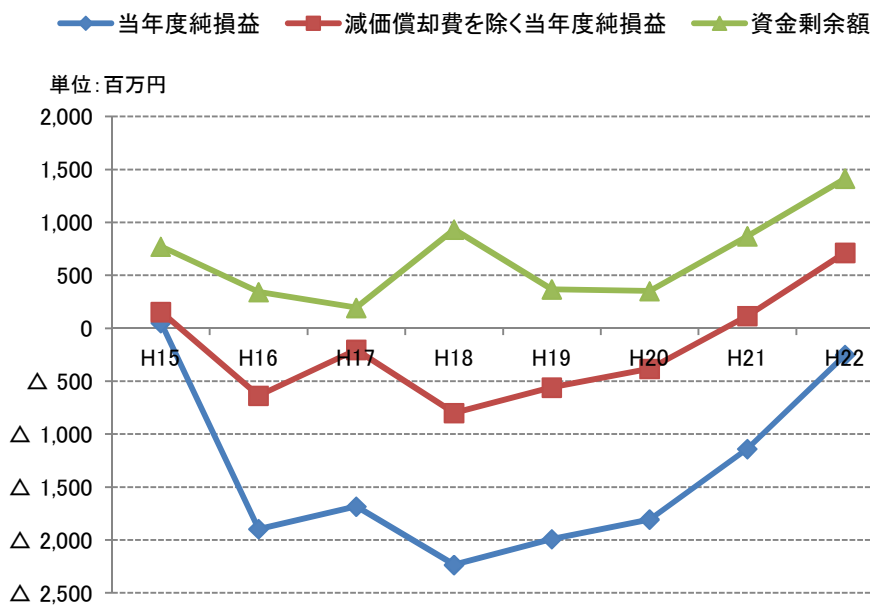
病院長をはじめとする幹部職員のリーダーシップのもと、診療局・看護部・事務局・PFI事業者全てが一体となり、改革プラン実施前と比較して、多くの指標がプラス方向に伸長しています。昨今の医師不足をはじめとする厳しい医療情勢の中、医師をはじめとする医療スタッフの増員、高度医療をサポートする医療機器の増設、総合医療情報システムを中心とした院内ネットワークの強化等、医療の質の向上に資する様々な施策を実行しています。

現在、さらなる医療の質の向上と健全経営をめざし、平成24年度からの3ヶ年計画の策定に入っています。引き続き、患者さん、市民、地域の医療機関から信頼され、安心して診療を受けていただける病院をめざしてまいります。

八尾市立病院の経営状況（主な経営指標）

主な経営指標について改革プランの前後を比較してみました。

純損益・資金剰余額等の推移

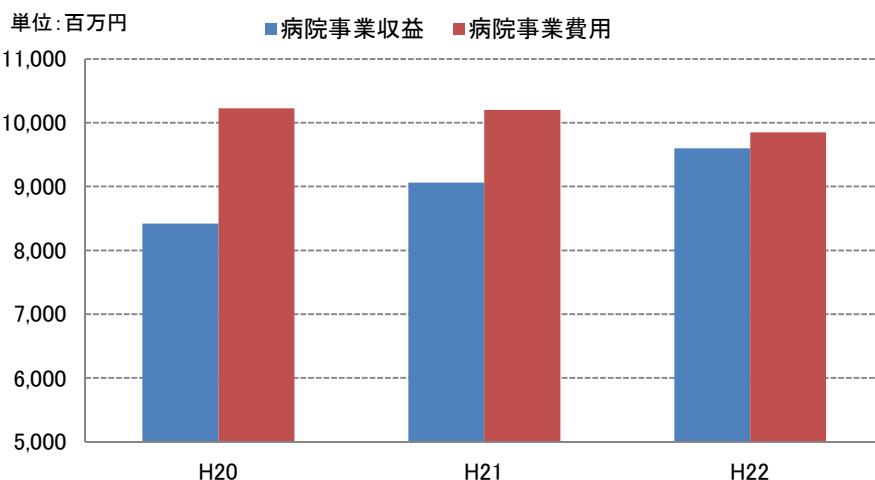


新病院開院の平成16年度以降、単年度収支ではマイナスが続いています。市の災害医療センターとして免震構造を取り入れた建物の整備や、高度な診療機能を発揮するための医療機器の整備に伴う減価償却費負担が大きく影響しています。

改革プランでは平成22年度に“減価償却前収支の黒字化”を目標にしておりましたが、平成21年度にはこれを実現することができました。

その結果、病院経営指標の1つである資金剰余額も増加し、平成22年度決算では約14億1500万円となっています。

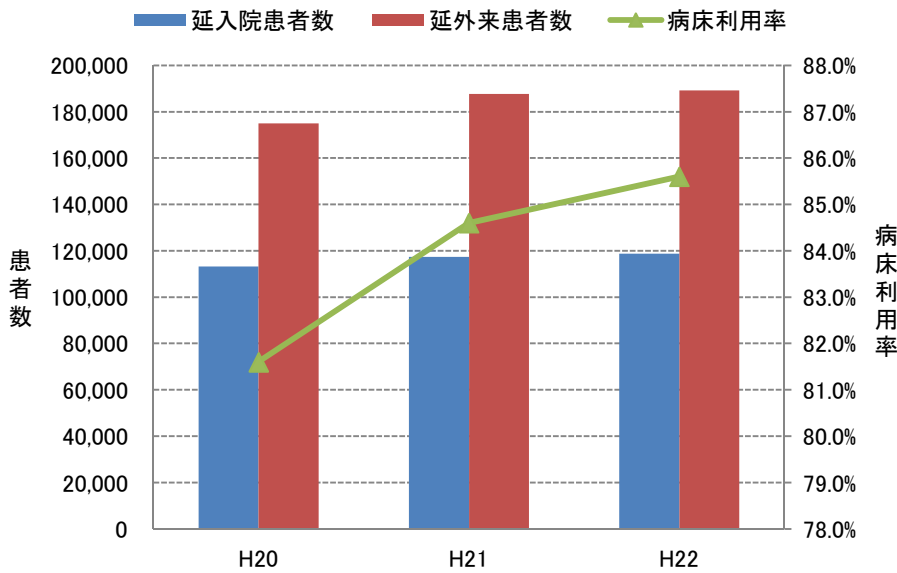
病院事業収益と費用の推移



平成20年度から22年度にかけて、病院事業収益は伸びていますが、病院事業費用は低下傾向にあります。

改革プランに病院全体で取り組み、業務効率の向上や院内連携・協力の強化などを実践した結果、費用を大きく増やすことなく収益を伸ばすことができました。

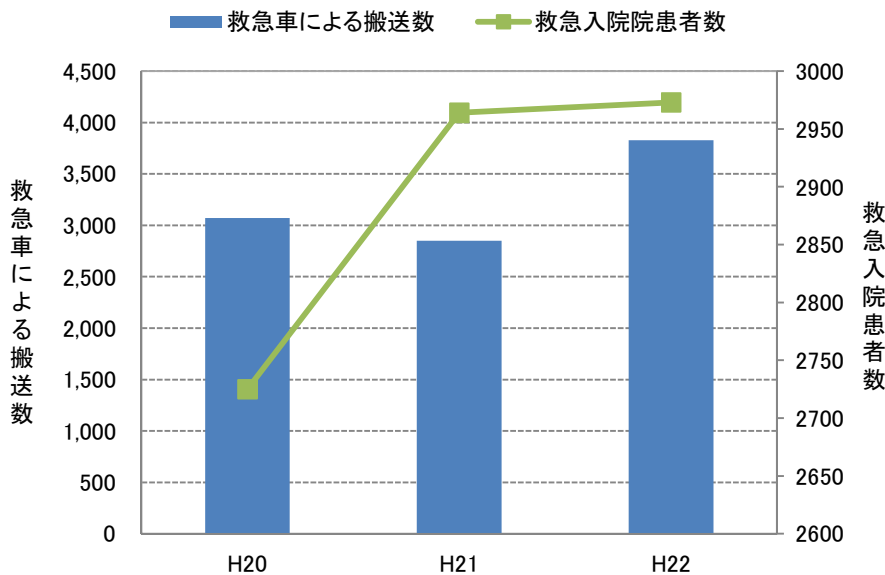
入院・外来患者数の推移



外来については限られたスペースの中で、診察室のフレキシブルな運用の工夫や外来化学療法（抗がん剤治療）の増などにより患者数は増加傾向となっています。

入院患者数についても、周産期・小児医療・救急診療といった政策医療を担う医療機関であるため、ベッドコントロールが難しい状況ではありますが、平成 20 年度から 22 年度にかけては病床利用率で 4%アップとなっています。

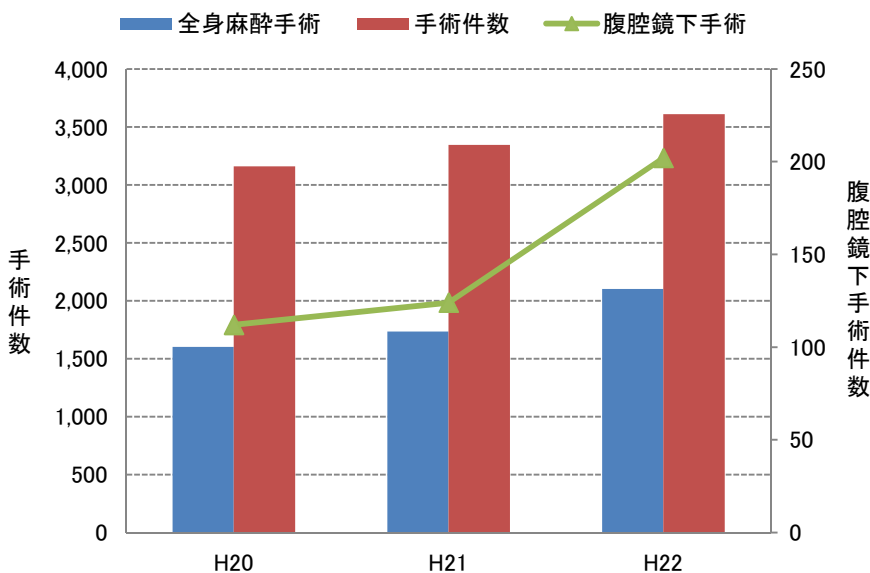
救急車による搬送数・救急入院患者数の推移



平成 21 年度は新型インフルエンザの流行による発熱外来対応で、救急患者数自体は大幅に増えましたが、その混乱もあり、救急車による搬送患者数は微減しました。しかし平成 22 年度は循環器疾患を対象とした「心臓コール」を開始するなど積極的な取り組みをした結果、救急車による搬送数は大幅にアップしました。

また、救急からの入院患者数も平成 20 年度から 22 年度にかけて約 250 名の増となっています。

手術件数の推移



外科系診療科が積極的に手術症例に取り組むとともに、麻酔科や ICU（集中治療室）といった中央診療部門の体制強化に取り組んだ結果、平成 20 年度から 22 年度にかけて手術件数で 14%、全身麻酔の手術件数では 31%増加しました。

また新しい技術であり、患者さんの身体的負担の少ない「腹腔鏡下手術」にも積極的に取り組み、平成 20 年度から 22 年度にかけて 80%の増加となりました。

東日本大震災への職員派遣

平成23年3月11日に起こった東日本大震災では、未曾有の大きな被害が発生しました。被災されました皆様に、心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

八尾市立病院でもすぐに危機管理対策委員会を開催し、被害状況の把握と被災者の受け入れ態勢、医薬品・診療材料の物流状況を確認し、必要な対応について協議しました。

また、被災地への医療スタッフの派遣については、現地での指揮命令系統の混乱を避けるため、医師会・看護協会などの関係機関と連携し、まず、3月27日から30日の4日間、日本看護協会の災害支援ナースとして看護師1名を派遣いたしました。



災害支援ナースの活動の様子
(宮城県石巻市)

さらに日本医師会災害医療チーム(JMAT)の一員として、5月27日から29日の3日間、8名編成の災害医療チームを岩手県大槌町に派遣いたしました。



5月27日から派遣された八尾市立病院災害医療チーム(医師2名、看護師2名、薬剤師2名、事務員2名)。現地避難所での医療活動に従事しました。

大規模災害発生を想定したトリアージおよび応急救護訓練

9月11日(日)、八尾市防災訓練に合わせ、市立病院では大規模災害発生を想定したトリアージ・応急救護訓練を実施いたしました。



医師・看護師・事務職員など約50名のスタッフと市消防本部に協力いただいた模擬患者による訓練。



災害対策本部の設置、トリアージセンター・応急救護所・仮設ベッドの設置、さらに模擬患者の受け入れからトリアージによる重症度に対応した救急処置の実施まで、約2時間の緊迫した訓練となりました。訓練の中で気づきを今後のマニュアル改訂や実際の緊急時の対応等に反映させてまいります。

公開講座のお知らせ

市立病院では、皆さまに日頃から病気に対して関心を持ち、新しい情報と正しい知識を身につけていただくために、公開講座を実施しています。ぜひ受講してください。

■第17回公開講座

平成24年1月14日(土)

午後2時～午後4時

市立病院4階大会議室

今回は、当院の脳神経外科部長の都築貴医師による講演などを予定しています。

※ 定員は100名です。

※ お申込み・お問い合わせは

☎072(022)0881

公開講座係